研究分野	資源評価	部名	漁場環境部
研究課題名	アカイカ資源調査		
予算区分	委託　水産総合研究センター		
試験研究実施年度・研究期間	平成３年度～平成１８年度		
担当	清藤真樹		
協力・分担関係	（独）遠洋区水産研究所		

＜目的＞

春から夏の初漁期においてアカイカ漁業の対象となっているのは東経１７０度以東の秋季発生中部系群であり、本系群の経年的な資源変動については、１９７７年から毎年７月に中部太平洋（東経１７５度３０分）において実施された流網調査によりモニタリングされてきた。１９９９年まで北海道大学水産学部が実施してきたが、２０００年より水産庁遠洋水産研究所（現独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所）外洋イカ研究室が引き継ぎ、本系群の資源状況及び資源変動機構解明のための調査を進めている。また、本県はアカイカの主水揚港を持ち、同期にこの海域で操業する船も多く、この系群の動向を解明することは重要なことである。そこで遠洋水産研究所からの委託を受け、試験船・開運丸により下記の項目を目的として調査を行っている。

（１）盛漁期である７月に東経１７０度以東のアカイカ漁場におけるアカイカ秋季発生中部系群の資源レベルを推定する。

（２）盛漁期における海洋構造とアカイカ漁場形成の関係を明らかにする。

（３）盛漁期におけるアカイカ触腕の再生個体の出現頻度を明らかにする。また、脱落の状況について情報を収集する。

（４）カツオ、ビンナガ、カジキ、シマガツオ、アカイカ、サメ、海鳥、イルカの高次捕食者及び小型浮魚類の標本を採集する。

＜試験方法＞

独立行政法人水産総合研究センターからの委託により、当該センター職員が試験船・開運丸に乗船し、傭船調査により下記の調査を行う。

（１）調査海域：北太平洋公海のアカイカ漁場域（北緯３８度３０分～４７度３０分、東経１７０度００分～１７５度３０分）内（図１）

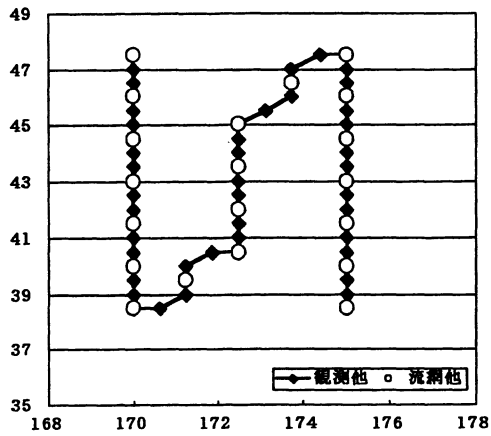

図１　調査点の配置

（２）調査期間：平成１６年７月３日から８月３日まで

（３）調査項目

イ）海洋観測：ＣＴＤ観測（水深１，０００m、水温、塩分）、ＡＤＣＰ（流向、流速）透明度、水色、表面水温、クロロフィル分析等

ロ）流網調査：１３種の目合の流網５０反（調査網３４反、商業網１６反）を用い、日没に投網、日出に揚網を行う漁獲物調査。

ハ）ノルパックネット採集：観測用ウインチを用い、ノルパックネット（口径４５cm、長さ１８０cm、目合０．３５mm）で水深１５０m～０mの鉛直曳き採集を行う。

＜結果の概要・要約＞

（３）の調査項目について、調査員から無線局を通じ調査状況の連絡を受け、毎日遠洋水産研究所他関係機関に報告を行うと共に、全ての調査終了後、観測データ、サンプル等を同所に送付した。

また、同期間、東西の調査ラインにおいて遠洋水産研究所所属の俊鷹丸により、この海域のアカイカにとって最も重要な餌料と考えられるハダカイワシの分布定量化の調査も行っており、多角的な調査を進めることができた。

＜今後の問題点＞

平成１６年度からアカイカ資源動向をつかむ目的で、当センター試験船・開運丸と遠洋水産研究所試験船・俊鷹丸との２隻体制で調査を進めることになったが、調査継続に関しては委託予算の縮小傾向などの厳しい状況が続いている。一方、新たに同海域に回遊する秋季北太平洋中部系群の産卵場、稚仔発生量調査などの計画もあり、更に多角的な調査を行う方向性がある。本県にとって同海域のアカイカ資源は重要であり、主に操業する中型イカ釣漁船の経営の厳しさを益す中、調査に対する要望は高い。公海アカイカの有効利用のためにも調査の効率化を含め事業の継続が望まれる。

＜次年度の具体的計画＞

（１）調査期間：平成１７年７月１日から８月５日まで

（２）調査目的

イ）初漁期におけるアカイカ秋季発生群の加入経路と加入モニタリング。

ロ）イカ釣り漁場における海洋環境

（３）調査項目

イ）海洋観測：ＣＴＤ観測（水深１，０００m、水温、塩分）、ＡＤＣＰ（流向、流速）透明度、水色、表面水温、クロロフィル分析等

ロ）流網調査：１３種の目合の流網５０反（調査網３４反、商業網１６反）を用い、日没に投網、日出に揚網を行う漁獲物調査。

ハ）ノルパックネット採集：観測用ウインチを用い、ノルパックネット（口径４５cm、長さ１８０cm、目合０．３５mm）で水深１５０m～０mの鉛直曳き採集を行う。

＜結果の発表・活用状況等＞

発表誌：平成１６年度北太平洋アカイカ資源調査報告書（独立行政法人水産総合研究センター・遠洋水産研究所）